# 病後

豐島與志雄

## 一

三月には入つてから間も無く惣吉は四十度は上る高熱に襲はれた。それが二三日して三十七度内外の熱に下つた。醫者は氣管支加答兒だと云つた。然し毎日一定の時に上下する輕微の熱は執拗に彼から去らなかつた。その間彼は會社の方に病氣缺勤の屆を出して靜に病床に横つてゐた。後には暖い日に起き出して家の中を歩き廻つたりした。

はじめ彼は寢ながら種々なことを考へた。母のこと自分のこと、肺の病で逝つた姉のかよ子のこと、姉の娘のより子のこと、それから生活とか人生とかいふことも考へた。過去の思ひ出に耽つたり、未來の空想のうちに光明を認めたりまたは寂寞を感じたりした。然し後には彼は何にも想はなくなつ

た。種々な思ひは皆茫然たる夢のやうな心地に融け込んでしまつた。彼はたゞまじ〳〵と天井板の木目を見たり、移つてゆく障子の日影を追つたりした。障子が開くと向ふが一面に見晴らせた。高い湯屋の煙筒から煙が横に流れてゐた。春に移つてゆく頼り無いやうな空には鳥が高く飛でゐた。そして彼の心は、何か譯の分らぬ小さい苛ら立たしさに滿ちながら、それでも大きい靜安のうちに在つた。何かかう底の知れないやうな深い大きい靜安のうちに。

彼は毎朝含漱の折に出る痰に注意を向けることを怠らなかつた。彼は母の眼を避けながら、かよ子の病氣のまだ新たな記憶を持つてゐる母の眼を避けながら、毎朝赤味を帶びた重さうな痰が出るのを見た。そして彼のはじめの危惧はいつのまにか心の中で肯定された形を取つてしまつた。彼の心は何か重い不可抗のものに壓へつけられた。そしてそれが却つて彼の心を靜かにした。彼は特殊な悔ひも希願も自ら意識しなかつた。神經が折にふれて苛ら立つことはあつても、常に深い水底に眼を閉ぢてゐるやうな心地を彼は失はなかつた。

さういふ靜安のうちに居て彼は只漠然と時が過ぎることを感じた。平調なゆるやかな時が夜も晝も一樣に過ぎていつた。眠れぬ夜にぼんやり眼を開いてゐたり、朝食後またすぐに床には入つて眠つたりした。時には寢汗が出た。そして晝間はよく夢を見た。

惣吉はいつものやうにまた夢を見た。うと〳〵としかけると彼の頭は一人で空想に耽つてゐた。そ

の空想がそのまゝに夢となつてゆく。種々な出來事や事件が光りや影と入り亂れて、妙な不透明な、世界を作つてぐる〳〵と廻轉する。眩暈に似た一種の痛みを頭に感じながら彼はそれを見つめてゐる。と次第にその世界が遠くなり明るくなると共に、何等かの變化、怪しい糸の縱橫に亂るゝやうな變化が起つて、彼はいつのまにか本當の夢の中には入つてゆく……。

然しどんな夢を見たか彼は覺えなかつた。たゞうつとりと眼を開くと、側により子が居るのが分つた。彼女は緣側の日向に身を投げ出して雜誌の口繪を見てゐた。惣吉はその悧發らしい橫顏と黑い髮と細い指先とを見た。そしてまたこの小さい子が家の中に持つて來た種々な記憶と影とを思つた。

より子が家につれて來られた時のことを惣吉ははつきり覺えてゐる。彼女を伴つて來た年增の女は、黑繻子の襟のかゝつた着物をきて銀の延べの煙管ですぱ〳〵と煙草を吹かした。そしてより子は惡びれもしない高慢ちきな顏をして澄まして坐つてゐた。その悧發な顏を病めるかよ子はどんなにか躍る心で眺めたらう。

かよ子が事情の許さぬ男の許に走つた時はまだ父も生きてゐた。然しその男から捨てられ、妊娠の身を惣吉につれられて再び家に歸つた時はもう父は居なかつた。けれど周圍に對する氣兼ねから、產まれたより子はすぐに他處にやらなければならなかつた。それから六年後かよ子が病氣になつた時、より子を家に引き取らうと惣吉が云ひ出した時に母はすぐに贊成した。そしてより子は家に來た。然

しより子がその間に如何なる暗い影を背負つてゐたかを、彼女の母は知らずに死んでしまつた。

惣吉はそのまゝまた眼を閉ぢた。眼瞼の底に黒い線がちら〳〵往き來するのをやゝ暫く見つめてゐた。それから妙に暗い心地になつて眼を開くと、より子がぢつと彼の顔を見てゐた。

より子はすぐに視線をそらして雜誌の上を眺めた。惣吉は何處かに喫驚したやうな氣持ちを覺えた。そして暫くより子の姿を見つめてゐた。より子はたゞぢつとしてゐる。

「よりちやん、何か面白いものがあるの。」と惣吉は云つた。

より子は眼を擧げて彼の方を見た。一寸探るやうな眼付をしてゐたが、口元に微な笑みを湛へて、

「あたしよく分らないわ。」と云つた。

惣吉はその雜誌を持つて來させた。そして中の寫眞版の意味を說明してきかせた。それには戰地の悲慘な物語りが大部分をしめてゐた。より子は始めおとなしく聞いてゐた。けれど暫くすると、惣吉が說明してゐる頁の端にそつと爪の跡をつけたり、眼をそらして向ふの空を眺めたりした。

「もう止さうね、面白くないでせう。」と惣吉は云つた。

より子は喫驚したやうに惣吉を見た。

「あたしよく分らないわ。」と彼女はまた云つた。

「あゝよりちやんには少しむづかしいかも知れないね。けれどよりちやんは人から云つて聞かせて貰

ふのがきらいでせう。自分一人で見るのが好きなんだね。」惣吉は笑顔で默つてゐる彼女を眺めた。「でもね、はじめはやつぱり人から敎はらなければ何にも覺えませんよ。はじめよく人に敎はつておくと後ではもう誰にも聞かないでみんな分るやうになるんですよ。よりちやんは豪くなるのが好きなんだね。」

「えゝあたし豪くなるわ。」かう云つて彼女は口元を引き緊めた顏付で惣吉を見た。「御本だつて少しは讀めるわ。」

「學校にも上らない先からよめるものですか。」

「いゝえ讀めるわ、讀めるわ。」

より子は前にある雜誌をとり上げて讀みはじめた。妙な調子をつけて出たらめなことを聲高に云ひ續けた。そしてだん〳〵彼女の調子は急に激しくなつて來た。惣吉は喫驚して彼女を見つめた。

「もうお止しよ！」

より子はふと默つて惣吉を見た。彼女の眼は黑く大きく開かれて大膽に惣吉の上に据ゑられてゐた。惣吉は視線をそらして、向ふの空を見た。空には一杯に日の光りが在つた。

「お母ちやんは今何してゐらつしやるの。」と惣吉は暫くして思ひ出したやうにより子に尋ねた。

より子は默つて頭を振つた。そして何かを押し隱しでもするやうにちつと下を向いた。

「兄ちやんは一寸仕事があるからお母ちやんの所で遊んでお出なさい、ね！」

より子は默つてゐた。

「ね一寸階下で遊んでおいで。兄ちやんは今用があるんだから。あとでまた遊びませうね。いゝ子だからね。」

「お母ちやんがさう仰言つたの。」とより子は暫くして云つた。「兄ちやんが一人で淋しいから遊んでおいでつて。」

「嘘を云ふものではありません。早く階下へおいでなさい。」と惣吉は大きい聲をした。

より子はそれでもまだ立たうとしなかつたが、惣吉がそれきり何とも云はないので、すつと立ち上つた。そしてぱた〳〵と緣側をかけて行つて梯子段を下りていつた。

惣吉は起き上つて障子を閉めた。それからまた床の中には入つた。彼は何か暗い影を見つめてゐるやうな氣がして、一人でぢつと何時までも眼を閉ぢてゐたいと思つた。で蒲團に顏を隱して壁に向つて寢た。するとより子のこともすぐに茫然と遠くに消えていつた。病氣の間にいつのまにか彼は、凡てのことを心の中からかき消すことに馴れてしまつた。

彼の心は靜かであつた。彼は眼の前に漠然とした自由の影を描いた。そして只自分一人在る安らかな自由の影を遠くへ遠くへと追つていつた。ずつと都會の上を超え、木の梢を越え、野のはての地平

線を越えて空の彼方まで、彼の夢心地の空想は飛んで行つた。そして彼はうと〳〵とした。

それからどれだけ時間が過ぎたか彼は知らなかつた。母がそつと障子を開いて封書を持つて來た。

「眼が覺めてゐたんですか。」と母は云つた。

手紙は惣吉の同僚の一人の江上からのであつた。それには彼の病氣を氣遣つた文句があつた。彼の心を勵ます文句があつた。そして心靜かに養生するやうに、何かの節は及ばずながらお力になりたいと結んであつた。惣吉は讀み終つて、そのまゝ机の上にのせた。そしてそれはた〻會社の方の友達からの病氣見舞の手紙だと云つた。

「私はまた何か會社の方に用でも出來たんぢやないかと思つてね……」と母が云つた。それから彼女は眼を伏せるやうにして、「今日は氣分は少しはいゝ方ですか。」

「えゝもうすつかりいゝんですよ。もう本當に起き上つてしまつてもいゝんですけれど、何だか寢てゐる癖がついてしまつたもんですから。」

「えゝ〳〵寢てゐなくちやいけませんよ。今になつてまたぶり返しでも仕樣ものならどうします。ほんとに家はお前さん一人で背負つて立つてゐるんですからね。それはね若いうちは身體のことなんか何とも思はないんだけれど、私の此度の心配つたらどんなだつたでせう。家もこの節ずつと不幸續きですからね、餘程用心をしないともう取り返しのつかないことになつてしまひますよ。今お前さんに

どうつといふことがあつてごらんなさい、家はそれこそ本當に闇になつてしまうぢやありませんか。」

「でももう病氣がよくなつたんだからいゝでせう。」

「ほんとにね、私もこれ位嬉しいことはありませんよ。けれど何と云つてもまだ本當にいゝんぢやありません。お前さんの顏色を見てごらんなさい。一層のこと他にいゝお醫者さまに見て貰つたらどうでせう。そしていゝか惡いかはつきりきめてしまつてはね。どんな病氣があつても輕いうちは自分で氣付かぬものですからね。」

「えゝ、でも今少し樣子を見てからにしませう。」と惣吉は答へて、ぢつと母の顏を見た。と母の氣遣つてゐることがはつきり分るやうな氣がした。それで彼は話を轉じた。

「よりちやんは今家に居ますか。」

「えゝ階下でお友達と遊んでゐますよ。あの子もね餘りきついものだからお友達が少くつて……」

「今日お母さんが兄ちやん所で遊んでおいでと仰言つたんですか。」

「え、私が、……いゝえ云ひませんよ。」と答へて母は眼をしばたゝいた。

「あの子はほんとに悧巧な所がありますね。でも注意しないと……」惣吉は後を云はなかつた。

「私も心掛けてるつもりですがね。……考へると可愛想でもあるし。」

二人はそれきり默つてしまつた。そしてぢつと互の眼を見入つた。彼等の心には、より子の後ろに

擾つてゐる悲しい記憶が一杯に滿ちてゐた。惣吉はそれが次第につらくなつた。斯うして居ることが母を苦めるやうに思へて來た。

「私少し眠いやうな氣がしますから。」と彼は云つた。

「えゝ靜に眠るのが一番いゝですよ。」と云つて母は惣吉の顏を覗き込むやうにした。「それでは私は階下に行つてゐますからね、用がある時は何時でもお呼びなさいよ。」

彼女は惣吉に蒲團を上から押へつけてやつて、それからそつと障子をしめて出て行つた。

惣吉はぢつと眼を閉ぢた。と右の肺尖のあたりが重苦しく痛むやうに覺えた。彼は兩方の鎖骨の後ろを撫でゝみた。右と左とどうやら中の組織が違つてゐるやうにも感せられた。そして暫く右の肺尖のあたりを擦つてゐた。そのうちに寢てゐるのが苦しくなつた。

彼は起き上つて緣側に出た。

午後の光線が一面に人家の上に降りそゝいでゐた。彼は透すやうにして青空を仰ぎ見た。空の高くに何かかすかにきらめくやうなものがあつた。彼は急に暗い處から廣い明るい世界に出たやうな氣がした。そして兩腕を大きく擴げてみた。とその時彼の胸のうちに涙ぐまるゝやうな感情が湧いた。彼は母のことを思ひ出した。先刻それとなく逐ひやつた母のことを。

惣吉はまた室の中に入つて机の前に坐つた。机の上には數本の見舞狀と藥瓶とがのつてゐた。彼は

一寸蒲團の方を眺めたが、そのまゝ寢卷の上に褞袍を引つかけて、階下に下りていつた。母は火鉢の側でお仕事をしてゐた。惣吉の姿を見ると驚いたやうに針の手を休めた。

「どうかしたんですか。」

「いゝえたゞ起きてみたくなつたものですから。」

惣吉はたゞそれだけ答へた。そして母の姿を見るともう何とも云はないでいゝやうな氣がした。そして胸が安らかになつた。

「散歩に行つて來やうかしら。」と彼は一人言のやうに言つた。

「まだ散歩どころですか。」

「いゝえもうすつかりいゝんですよ。少しは外の空氣も吸はなけりやいけませんから。」

「ほんとによけりやいゝけれどね。」と云ひかけて母は信じられないと云ふやうな眼付で惣吉を見た。

「それでも今日はもう夕方に近いから、また暖い日にしたがいゝでせうよ。」

惣吉は母の云ふまゝに其處に坐つた。お茶を入れたりする母の側に、彼は安らかな心でゐた。

## 二

惣吉は二時頃友の家を辭し去つた。それは彼の幼い時からの友達であつた。二人は種々なことを話

し合つた。然し一寸散歩と云つて家を出た惣吉は、母が待ちわびてゐはすまいかを氣遣つて話なかばに座を立つた。

彼はからつと晴れた空をうらゝかな日光の下をゆつくりと歩いた。まだ頭や身體がふら〳〵としてゐたけれど、身内に清々しい喜びがあつた。歩むにつれて脚の筋肉の力強く伸び縮みするのをはつきり感じた。兩手を動かすと肩のあたりが自由に伸び〳〵とするのを感じた。そして彼は親しい心を以て通りすぎる人々を見た。

——大地の上を歩くのは人の大なる喜びであらねばならぬ。と彼は思つた。それには何か自由な朗らかな喜びがある。そして人の喜びや悲しみのうちでも、青空の下大地の上でのそれが一番純な敬虔なものであるだらう。もし人が大地の上を歩くことを禁じられて、常に床や疊の上にばかり居なければならないとしたらどうだらう。彼は、彼の心は干乾びて萎んでしまうに相違ない。實際人が大地の上を歩くことにはある神秘な自由な喜びがある。

彼は麗かな日光が自分の胸の中へ浸み透つてゆくやうな心地がした。けれども病後の彼の身體には何處か空虚な弱々しさがあつた。彼は久々で地上を歩く喜びを何等の矛盾なしに安らかな心で、病に犯されてゆく自分の肺のことを想像した。その時彼はちらと人生といふやうなものゝ影を心に浮べてみた。

格子を開けてそつと家に上ると、丁度奥からよう子が出て来た。彼女は眼を輝かしながら彼の所へ駈けて来た。

「中山の伯父ちやんが来てゐらつしやるわ。兄ちやんのお見舞にいらしたんだつて。」

「何處に？」と惣吉は低い聲で尋ねた。

「お座敷。」と云つてよう子は奥の方を指した。「お母ちやんとお話してゐらつしやるの。」

「ようちやんは何處へ行くの。」

よう子は分らないと云つた風に默つて彼の顔を見てゐたが、眼で笑つてそのまゝ向ふへ行つてしまつた。

惣吉は一寸眉を顰めたが、思ひ切つて座敷の方には入つていつた。

中山の伯父を惣吉は餘り好かなかつた。惣吉の父と共同の事業を父の死後すつかり自分一人の手に收めてしまつたのが彼だつた。その事業が惣吉への唯一の遺産となるべき筈であつた。それからよう子を家へ引き取ることに最も異議をとなへたのも彼だつた。それでも彼は時々訪れて來ては何かと親切らしい態度を見せた。

「やあ！」伯父は惣吉を見ると聲をかけた。「どうです、病氣の方は。……なあに若いうちは元氣でゐなければいけません。どし〳〵はね廻つてゐるうちには病氣の方から驚いて逃げ出してしまうですか

らね、ばゝは。用心もしなけりやなりませんがね、あまり凝りすぎても却つて病氣を重くすることがありますよ。まあ兎に角よくなつて結構です。」

「えゝもうこの分なら間もなく元の身體になるでせう。」

「さうです。今のうちにうんと滋養を取つて、大に働けるだけの餘地を作つておくんですね。でも此度は。」と伯父は母の方へ向いて、「大變御心配だつたでせう。實際老ては子に勝る寶なしですからね、ばゝは。」

「えゝほんとうにどれほど心配だつたでせう。これ一人が賴りでござんすからね。何だかう身體が細々したやうな氣が致すんでございますよ。」

それから會話はすぐに種々の問題に飛んでいつた。惣吉は時々伯父の言葉に二三言答へをするきりで、多くは默つて伯父と母との會話を傍から眺めてゐた。伯父は巧みに話題をそれからそれへと展開さして、その間々にあはゝと笑つた。母は從順に伯父の話に後からついて行つて、時々感心したやうに彼の得意な諧謔に笑みをもらした。宛も見知らぬ場所を母は伯父に手を引かれて見物して廻つてゐるがやうである。その間惣吉は晴い氣持ちに包まれて、障子に映つた木の枝に退屈な視線をなげてゐた。そしてそれが一時間許り續いた。

「またお顏の色が悪いやうだからお寢みになつてはいかゝです。」と伯父は俄に氣付いたやうに惣吉の

方を顧みた。それからかうつけ加へた。「どれわしもそろ〳〵お暇致すとしませう。」

「まだお早いんでございますよ。ごゆつくりお話しなすつていらつしやいまし。」と母は伯父に云つて、それから惣吉の方へ、「ほんとに氣分が悪いやうだつたら御免蒙つて寢んだらいゝでせう。」

「いゝえ今日は大變心持ちがいゝやうですから。」と惣吉は答へた。

「まあ精々御用心なすつたがいゝですね。」そして伯父は母の方へ向つて、「お宅でもこの節不幸續きでさぞ御心配でせう。それでもよく立派にやつておいでなさると家内とも度々話したことですがね。勿論惣吉さんのお働きもありませうが、お養えの方も種々なことに大抵ぢやあるまいとお察し致してゐるんです。」

「ほんとに別に財産とてあるんではありませんし、まだ學校を出たばかりの惣吉の手一つなんでございますから、いつも御厄介にばかりなつてゐまして……」

「いゝや何にもわし共だつて祿なことは出來ませんがね、もし御都合では少し位御用立致してもよろしいと思ひまして。」

「さう願へますれば——」と云ひかけて母は惣吉の方をちらと見た。「どんなにか助かるか分りませんで、どんなにかつらい思ひを致すんでございますよ。」

「惣吉が病氣した時なども、思ふまゝ養生させたいとは思ひましても、何や彼や思ふやうになりませんで、

「左樣、經濟の方の苦しみ位いやなものはありませんからね。少々ならお力になつても差支へありませんが……。然しかう云ふことはこれから大に世に立たうとする惣吉さんの勵みにもなりますから一寸一筆入れて貰へるといゝですがね。なに證書などゝ云ふほどのものでなくても、只一寸一筆惣吉さんから貰へますれば、これからの惣吉さんの心懸けもずつと違つて來るでせうから。若いうちはさういふことでもしておかないとどうも金について餘り無頓着になりすぎますからね、あはゝ。それも惣吉さんのお考へ一つですが。」

さう云つて伯父は紙卷煙草に火をつけた。母はぢつと惣吉を見た。惣吉は何時までも默つてゐた。

「なにそれは今すぐでなくとも御氣の向いた時でいゝです。今と云つてはわしも持ち合せがありませんからね。なあに今に惣吉さんが豪くなつて、昔伯父さん所へこんなものを書いて上げたことがあるなんて笑ひ話になる時が來ますよ。あはゝ。……所で大變長話をしました。まあ折角お大事になさるがいゝです。」

惣吉は無言のまゝ母の後ろについて伯父を玄關に送つた。

伯父が去つた後二人は默つてもとの座敷に引き返した。

「お前さんあの事はどうするつもりですか。」

と母は暫くして何かを憚るやうにそつと尋ねた。

「勿論こちらから願ります。」と惣吉はきつぱり答へた。

「でもねえ、折角伯父さんもあゝ仰言るんだから……」

「私は一體あの伯父さんが嫌いです。」惣吉は急に胸の鬱憤を吐き出してしまひたくなつて言葉をついだ。「お母さんもまだ、お父さんの亡くなられた後のことやより子のことなどを覺えておいでなさるでせう。それからまた今日の伯父さんの云ひ草つたらありはしません。親切らしう御用立てしませうと自分から云ひ出しておきながら、すぐに實際場に向つて借用證書を書かせやうなどゝするんぢやありませんか。私はそんな押し付けられた金を借りたかありません。」

「私もさうは思ふんですけれど……。でも今時の世にはあれでも親切な伯父さんと思つていゝ位でせうよ。それにさうすれば大變家の方も助かるしね。……なにも私が進んでどうといふんぢやありませんがね。」

惣吉は首垂れてゐる母の顔をぢつと見た。と突然何かゞ彼に分つてきた。

「家は今そんなに困つてゐるんですか。」と彼は云つた。

「困るといふほどではありませんがね……」

母も顔を擧げて惣吉を見た。一瞬間二人は默つて互の眼を見合つてゐた。

「ねえお母さん！」と惣吉は云つた。「たとひどんなに困つたつてあんな伯父さんの金なんか借りない

でゆきませうよ。生きてるうちは食へないなどゝ云ふことはありやあしません。私ももう病氣も癒つたしますからこれから働きます。働いてどうにかします。」

「いゝえお前さんにさう云はれると私が困つてしまうではありませんか。何よりも第一に身體ですからね。ずつかりよくなるまで養生しなけりやいけません。實はねお醫者さまも轉地したがいゝなどゝ仰言つたんですよ。私は影でどの位氣をもんだでせう。思ふまゝお前さんに養生もさしてあげられないのが私の身にとつてどれ位つらいか知れません。私もね、ひどい伯父さんとは思ふんですけれど、たいもつとお前さんにどうにかしてあげたいばつかりにね、……ほんとに氣を惡くおしでないよ。お前さんが嫌なことを私がどうしてするもんですかね。」

いつしか涙ぐんでゐる母を見て、惣吉の心はやるせなく痛んできた。彼はさういふ母を慰めるといふよりも、さういふ母を見る自分の心が堪へられなかつた。

「もういゝんです。何にも仰言らない方がいゝんです。……それぢや伯父さんの方は斷りませう。そして私達だけでどうにかやつてゆきませう。私は自分で、自分の氣分で病氣をなほしてお目にかけます。ほんとに何にも御心配なすつちやいけません。」

「たいお前さんが達者でさへ居てくれゝばねえ……」

さう云ひ乍ら母は其處らにちらかつてゐるお茶の道具や何かを片付けて臺所の方へ立つていつた。

惣吉は一人火鉢にあたれて思ひに沈んだ。彼は五十に垂んとしてなほ世帯に手を荒してゐる母のことを思つた。姉の悲しい記憶を負つてゐるより子のことを思つた。それから自分の病氣のことを思つた。また彼は父の死後に殘つた僅かな金と、それによつて支へられて來た姉の病氣と死、より子の事件、自分の病氣などを思つた。それからまた伯父の言葉や、母の言葉などを思ひ出した。彼は周圍から來る幾多の輕侮や壓迫を其處に感じた。そして胸の中に悲痛な感情が燃えて來た。

「凡てをはねのけたい！　そして自由な心でお母さんと呼び、よりちやんと呼びたい！」と彼は心の中で叫んだ。それからまた自分の胸に一杯に亂れてゐる感情を引き摑んで、廣い空間のうちに投げ散したくなつた。ほつと息がつけるやうな所へ浮び出でたくなつた。

室には何時の間にか電氣がついてゐた。惣吉は急にそれに氣がついて立ち上つた。そして緣側の戸を閉めた。久しく手にしなかつた兩戸の力強い感觸が、彼の心にある慰安を與へた。

その時彼はふと同僚の江上のことを思ひ出した。江上は惣吉の新らしい友で、常に彼に好意を持つてくれた。そして彼は極めて富有な生活をしてゐた。惣吉はこの前の江上の手紙を思ひ浮べながら、今夜その家を訪れてみようと思つた。その時彼はこの友の同情に訴へることに何等の疚しさも見出さなかつた。そしてさうすることが却つて自分にある力を與へるやうな氣がした。

夕食後惣吉は何氣なく散歩に出る由を母に云つた。

「今日は晝間も出かけたではありませんか。」と母は懇願するやうな眼付を惣吉に向けた。「晩にわざわざ出かけなくつてもまた明日にしたがいゝでせう。」

惣吉はたゞ少し外を歩きたい、すぐに歸つて來ると云つて母を納得させた。

その時母はそつとより子に分らないやうに次の室に立つた。其處の押入はより子がいつも自分の所有に屬すると思つたものを大事にしまつておく場所であつた。母は其處から銀鼠の羽二重のハンケチを持つて來た。そして惣吉に首に卷いてゆくやうに囁いた。

惣吉は默つてそれを首に卷いた。

「それぢや行つて來ます。」と彼は云つた。

その時側で人形を弄つてゐたより子が急に惣吉の方に向いた。

「兄ちやんどこへ行くの。お醫者さま？」

「えゝ。」と惣吉は微笑みながら答へた。

より子は默つて惣吉を見てゐたが、急に眼を大きく見開いて彼の首のあたりを見つめた。それから彼女は俄に人形を投り出して大聲で叫んだ。

「兄ちやんがあたしのハンケチを取つた。あたしんだ、あたしんだ……」

「兄ちやんはまだ御病氣だからね。」と母がなだめた。「ね、いゝ子だから貸してお上げなさい。一寸の

間よ。ね、まだぢきにお返ししますからね。」

「いやだ、いやだ。」とより子は泣き出してしまつた。

惣吉はそつとより子の背に手をかけて云つた。

「ね、よりちやんと兄ちやんとは大の仲よしでせう。そらいつかも一緒に遊んだでせう。ね、よりちやんは兄ちやんに何でも貸すんだね。お友達ですからね。」

より子はふつと泣き止んで惣吉の顔を見た。

「ね、一寸の間パンケチを兄ちやんに貸すんですね。」

「えゝ。」とより子は涙で一杯の顔に笑みを洩らした。「兄ちやんとおもやいにしませう。兄ちやん持つといて頂戴。」

「えゝ大事にして持つてゐますよ。」

惣吉はそのまゝ暗い心で家を出た。何かいしきりに自分に迫つてくるやうに覚えて心が急かれた。で頬を流るゝ冷たい空氣と軒燈の光りとが久しく病褥にあつた身には新奇に感せられたけれど、彼はすぐに辻の俥に身を托して江上の家に急いだ。

江上は喜んで彼を迎へた。そして小一時間許りして、彼は百圓足らずの紙幣を懐にして其處を辭した。それから歸りは一寸電車に乗つて、家の近くで下りた。

惣吉は初めてしめやかな夜の空の下に大きく息をすることが出來た。晴れてはゐれどぼんやりと霧込めた靜かな夜であつた。彼はまつすぐを見つめながら歩いた。その時彼は自分で擔ふべきものをはじめていくらか擔つたといふ氣がした。江上から受けた所のものはたゞ自分から得たものゝやうに思へた。そして淋しい力強い感情が胸一杯になつた。まだ身體の何處となく弱々しさや、冷たい空氣の觸れる頬の頼りなさなどが、その感情に悲壯な氣分を與へた。

——私は自分の擔ふべきものをすつかり擔ひたい。と彼は思つた。私は受けるよりもどんなにか與へたいだらう。もし周圍に向つて與へんとする心で對し得たなら……。然し私はまだ〳〵小さくて弱い。先づ母に對してでも……あゝたゞ母に對して私は今どんなにか受けるよりも與へたいだらう！

彼は仰いで空を見、それから祈るやうな心で淡い星の光りを眺めた。そして家の前に來た時、彼は一寸躊躇した。

家に入ると母がすぐに立つて來た。

「まあ遲くなつてどうしたんです。すぐ歸ると云つてお出かけだつたから、どんなにか氣をもんだでせう。……氣分でも惡かつたんではありませんか。」

母は熱い茶を汲んでくれたりした。

「よりちやんは。」

「つひいましがた寝たばかりですよ。」

「さうですか。……お母さん、もう身體もすつかりいゝんですよ。屹度。」

「まだそんなことを云つたつてお前さん、ぶり返しでもしやうものならどうします。今が一番大事な時ぢやありませんか。」

「ですけれどと……」云ひかけて惣吉は母の窶れた顔をぢつと見た。それから懐から金の包みを取り出して母に差し出した。「これをあげませう。」

母は喫驚して惣吉の顔を見つめたが、そのまゝ包を手に取らうとしなかつた。そして大變苦しさうな表情をした。

「どうしたんです。」と母の聲は震へた。

「いゝんですよ。お母さんも御存じでせう、江上を。あの人から借りてきたんです。氣持ちよく貸してくれました。……ほんとにお金なんかどうにでもなるんですよ。」

母は默つて包みを取つて中を開いてみた。それから又もとのやうにそれを包んだ。

「それはさうでせうけれどね。……私何だかお前さんに氣の毒な樣な氣がして……」

惣吉は母の眼から涙がほろりと落ちるのを見た。そして我知らず庇ふやうに母の背に手をかけて片

手で緊とその手を握つた。

「もうそんなこと云ふのは止しませうよ。」彼は云つた。「私達は今迄あまり遠慮しすぎたやうぢやありませんか。これからもつとお互に遠慮なく生きてゆきませうよ。」

母はぢつと惣吉の眼を見入つた　何もかも分つたといふ大きい眼で、そして凡てを許し凡てを容る輝いた眼で。惣吉はその前に次第に眼を伏せてしまつた。その時母は彼の手をしかと握り返して、そして慰めるやうなやさしい調子で彼に云つた。

「身體に障るといけないからもうお寝みなさいな。」

惣吉は頭がはつきりと澄んで、それから身體が熱く熱してゐた。母は彼によく蒲團をかけてくれてそれからそつと出ていつた。

一人になると惣吉は靜に眼を閉ぢた。然し彼の心のうちには何か喫驚してそして波打つてゐるものがあつた。彼は大きくなつてからはじめていま母といふものを、母の身體を、はつきりと自分の手で感じたのであつた。そしてはつきりと母の眼を、大きい愛に輝いた母の眼を見たのであつた。彼は今迄の母が如何に自分の遠くにあつたか、そしてまた今の母が如何に自分の近くにあるかを思つた。何かかう深い連鎖が見えてきた。お母さん！　と云つて兩手で抱いてやりたくなつた。ぢつとしてゐられないやうな氣がしてきた。そして遠くでもなく高くでもなくすぐ自分の下に深い所に、何かぱつと

した明るみが見えるやうな氣がした。

彼はその明るみをぢつと見つめた。するといつのまにかそれも消えて凡てがぼんやりと灰色に暈されてしまつた。そして消耗し盡されたやうな疲勞を全身に覺えた。……彼はそのまゝ深い眠りに落ちた。

## 三

翌日眼が覺めると惣吉は氣分が重く、腦の奥にそれと分らぬほどの痛みを感じた。熱を計ると七度五分に上つてゐた。そして彼は一日床に就いてゐた。それからその翌日もぼんやりと寢たり起きたりして暮した。

母は出來るだけの心を盡して彼の世話をした。然し二人共非常に言葉少なになつてゐた。彼等は互の眼を避けるやうにした。そして惣吉は床の中に寢ながら、ぢつと眼を伏せるやうにした。彼の胸はいつも何かで一杯になつて苦しくなつて來た。何かかうしつかりと摑りしめてゐるものがあつて、それが直接に胸の中までびく〳〵と震へるやうな氣がした。さうして彼は默つて母の云ふまゝになつた。飲み惡い滋養劑を取り、御飯も澤山食べた。

「無理をしてはいけませんよ。」と母が云つた。

「えゝ。でももうほんとにいゝんですよ。」と彼が答へた。彼は肺尖が悪いことを自ら肯定し、そしてそれを自ら忘れてゐた。

彼のその張りつめた静安な心に點々と印象を與へていつたのはより子であつた。

いゝ子はよく彼の病床の側で遊んでゐることがあつた。丁度その時お友達が遊びに來た。より子はすぐに下りて行つた。「今日は御用があるからまたあした遊びませうね」と彼女は云つて、再び惣吉の側に歸つて來た。「お友達は」と惣吉が云ふと、「もう歸つたの」と答へた。けれどそれから惣吉が話しかけても、彼女は怒つたやうに默りでゐた。そして惣吉もおしまいに默り込んでしまつた。——

ある時より子は姫様の繪を切りぬいて遊んでゐた。そして衣裝をつける段になつて、島田の鬘と元禄袖の着物とをつけてやつた。それで惣吉は島田髷をつけるなら振り袖にした方がいゝよと云ふと、「これでいゝわ」と云つて、いくら彼が何と云つてもきかなかつた。——

惣吉は神經が苛ら〳〵して、より子の相手をしてゐるのが嫌になることがあつた。「したで遊んでおいでなさい」とさういふ時彼は云つた。より子は立たうとしなかつた。それで惣吉は寢返りをして壁の方を向いた。やゝ暫くしてふり返るとまだより子が其處に居たので、彼は心から可愛相になつた。「もうしたに行かないで遊んでおいでなさい」と彼は云つた。すると何と思つたかより子は急に立ち上つて二階から下りていつた。——

惣吉はさういふより子によく探るやうな眼を向けた。そして彼女と母とを並べて見るのがつらくなつた。彼はその時非常に淋しくなつた。自分の足下がはつきり見えないやうな深い淋しさが起つた。彼はぢつと胸に両手を握り合せた。

三日目にはすつかり氣分がよくなつたのを惣吉は覺えた。それで朝から起き上つた。

「もうすつかりよくなつたんですよ。」と彼は母に云つた。

「え！　もうすつかり……」と云ひかけて母は自分で自分の言葉に喫驚したやうに口を噤んだ。そして彼女は何處か悲しさうな眼付きで惣吉を見た。

惣吉は家の中を歩いたり机の上を片付けたりした。彼が自分で肯定した肺尖の病はその時彼にとつてはもうすつかり過去のものとてなつゐた。彼が自ら肯定したことは自らそれを忘れる道であつた。彼はたゞ何物か前へ〳〵進まんとする力を身内に感じた。そして頬の筋肉がびく〳〵と震へた。朝食が遲くなつた日の例として、彼はその日も一時頃に牛乳を取つた。そして珍らしく茶の間に集つて母がお茶を入れたりした。彼女は戸棚から玉垂を取り出してそれをナイフで切つた。

「これは先に貰つたまゝそれなりになつてゐたんですけれど……。榮太樓のだから屹度おいしいでせう。たべてごらんなさい。」

それから母は思ひ出したやうにより子の方をちらと見て云つた。

「昨日だつたかね、よりちやんが私に向つて、いつ兄ちやんはお起きになるのつてきくからね、よりちやんがおとなしくしてゐるとすぐにお起きが出來るんですよと云ひますと、そのまゝ二階に上つていつてしまつたんですよ。」

「ほんとにおとなしかつたんですね。」と惣吉はより子の方に云つた。「だからごらん、兄ちやんはお起きしましたでせう。」

その時よりちやんはちらと惣吉と母との方を見たが、そのまゝ顔をふくらして默つてしまつた。そして親指の先でしきりに疊に爪のあとをつけはじめた。そして何と云つても機嫌が直らなかつた。それで母はふと思ひ出したやうに玉垂を二つ三つ手に握らしてやると、彼女はそれを其處に投り出してしまつた。

その時二人には初めてより子のいつもの癖が思ひ出せた。

「何といふことです！」と母は少し聲を高くした。「どうしていつまでもさうなんでせうねえ。私が兄ちやんにお食べなさいと云つてよりちやんにさう云はなかつたからつて、そんなに怒るものがありますか。いつもあんなに云つてきかせてゐるではありませんか。もう忘れたんですか。……さあ此度だけは勘辨してあげるから、そのお菓子をお拾ひなさい。そしてあやまるんですよ。」

より子はぢつと身動きもしなかつた。

「まだ分らないんですか。そんな分らないことを云ふならもうお母ちやんになつてあげません。私は兄ちやんのお母さんですよ、ねえ兄ちやん。」

その時より子は急に身を起して、おい〳〵泣き乍ら母の膝をしつかと捉へた。

「いや〳〵、私のお母ちやんだ、私のお母ちやん！……」

「もう分らないことは云ひませんか。……それならお母ちやんになつてあげますから、さあ〳〵泣かないでお菓子をお拾ひなさい。こんどからそんなことをするときゝませんよ。」

より子はまだしく〳〵泣きながらお菓子を拾つてそして母の膝に抱きついた。母はそれを膝の上に抱き上げた。

「もう泣くんぢやありませんよ。ね、もう分らないことは云はないでせう。」

母はより子の頭を胸に抱いて、それから惣吉の方を見やつた。

惣吉は何とも云へない感じがした。彼はその時、より子は實際母の初孫であるといふことを思ひ浮べた。そして彼はさういふ二人を見るに忍びないやうな氣がした。

「私張り物をしかけてゐますから、さあおとなしくするんですよ。」と母はより子に囁くやうに云つた。

それで惣吉も立ち上つた。そしてそのまゝ二階に上らうとした。

「寢んでた方だよくはありませんか。」

「ええ。」と、彼は母に答へた。

惣吉は二階に上つてぼんやり机の前に坐つた。そして悲痛なもので胸が一杯に塞がれた。彼は自分の胸の中に、其處に宿つてゐる母や姉や、より子の姿をはつきりと思ひ浮べた。そして何かを切り捨てなければならないやうな氣がしてきた。何を？　それは自分にも分らなかつた。そして彼はぢつと一つ所を見つめてゐた。

その時母の聲がした。「まだ寢まないんですか。懸けてあげませうか。」

惣吉は躊躇してふり返ると、母が梯子段から首から上だけ出してゐた。

「ええ、一寸手紙を一つ書きますから……。自分でしますからよろしいんですよ。」

母はおづ〳〵した眼付きで惣吉の顏を見てゐたが、そつとまた下りていつた。

惣吉はそのまゝ机の上の肱に顏を埋せた。すると熱い涙が次第に眼瞼に溢れてきた。そして彼は卒然として起つた哀愁に身をゆだねた。涙の眼を上げると、明るい光線が空の遠くにちら〳〵と光つてゐた。立ち並んだ屋根の上にはほんのりとした濕みがあつた。彼はそれを賴り無いものに見た。そして遠く、空間に視線をやることが堪へられないやうな氣がした。

——なぜ互に心をぢつと見つめてはいけないんだらうか。と彼は思つた。母とより子と私と、私達が互の心を見つめやうとする時に、なぜ眼をそらさなければならないやうなものを其處に見出すんで

あらうか。私達は見てはいけないだらうか。愛してはいけないだらうか。

その時彼は死んだ姉のことを思つた。戀を失ひ世に葬られた姉のことを。終りの陰鬱な六年の間彼がその唯一の友であつた姉のことを。同じ空の向ふに視線をやりながら二人が互の心を見つめてゐた日、互に愛し慈しんでゐた日、その日のことを彼は思つた。そして彼は眼をつぶつて、凡ての人を抱かんとする愛を心の中に感じた。

彼は立ち上つて帽子を手にした。そして裏で張り物をしてゐる母の所へ行つて、散歩に出る由を告げた。

母は何とも云はないで彼の顔を見た。

「そして一寸姉さんのお墓にもまゐつて來やうと思ひますから。」と彼は云つた。

「私も一緒に行きたいけれどね……」と母は囁くやうに云つた。

けれどその時彼女は正面にぢつと惣吉の顔を見た。惣吉はその眼の中に母の悲しい愛情の訴へを見た。そして彼は何とも言葉を發することが出來なかつた。

「兄ちやんあたしも一緒につれていつて頂戴。」と側に居たより子が云つた。

「またこんどつれてつてあげませうね。今日はお醫者さまにも寄るんですからね。お母ちやんと遊んでいらつしやいよ。」

「え、。……いつていらつしやい。」とより子はませた調子でかう云つた。

惣吉はより子のことを悲しく思ひながら家を出た。それから電車で青山の墓地にゆき、姉の新らしい墓標の前に立つた。そしてそれから眞直にまた家に歸つた。

惣吉は至る所に春を見た。樹々の梢には柔い天鵞絨のやうな若葉が出かゝつてゐた。黒い地面からは青草の芽が伸びてゐた。麗かな日光が凡てのものを暖めたのだ。日向には小さい昆蟲が飛んでゐた。そしてまだ霞込めぬ初春の空には眼覺めたやうな輝きがあつた。鳶が高く〳〵飛んでゐた。

惣吉は空を仰いで眼瞼に快い眩しさを感じた。路傍に何か光つてゐるものを見た。そして爽かな空氣を胸に深く呼吸した。手を擴げると指の間々が快かつた。

彼は墓地の安靜を見た。その安靜のうちに逝つた姉のことを思つた。然し過ぎた日を愛することはやがて現在の生を感ずることであつた。彼は死の安靜を見て自らの生の力を感じた。——私はどんなにか姉を愛したことであらう。また、どんなにか今も愛してゐることであらう。愛することは生きることである。生きることは力である。あゝ私は自分のうちに燃えてゐる力を感じて胸が苦しくなる。

然しその時彼は何かを忘れてゐるやうな氣がしてゐた。到底思ひ出すことの出來ない何か遠く〳〵ものを忘れてゐるやうな氣がしてゐた。そして頭の中が堅くなつてゐた。

家に歸ると母が彼の眼を覗くやうにして見た。彼女の顏には何かを求めるやうな表情があつた。

「もう外はすつかり秋ですね。」と惣吉は云つた。

「さうでせうねえ。」

「晴々として實にいゝお天氣ですよ。お母さんもちつと外にお出かけなさいよ。あまり家にばかり居るとよくありませんから。」

「でもねえ、まさかこの年でぶら〳〵散歩でもありませんからね。」と母は淋しい顏をした。

「それぢやまたよりちやんをつれて姉さんのお墓へでもいらしたらいゝでせう。實際いつ行つても墓地はいゝものですよ。」

「さうね、さうしませうかねえ。……あの子はほんとに不幸な子でしたからね。大變快活だつたのにあの事があつて家へ歸つて來てからといふものは、すつかり沈み込んでゐましたね。無理もありませんよ。どんなにか淋しかつたでせう。今思ふと、あの子が考へてゐたことは私が思ひも及ばない深いことだつたやうな氣がするんですよ。そしてまだあの子の悲しさうな眼付きがはつきり見えるやうな氣がしてね……。あゝなるんだつたらもつとどうにかしてやればよかつたんですがね。それによりちやんもあんな風だし……」

「よりちやんはそれでも大變いゝ所を持つてゐるんですよ。私達はあの子をほんとに注意して育てなければなりません。屹度悪い所は直りますよ。……私達は方々からどんなにか輕蔑や嘲りを受けて

ゐることでせう。それを償つてやりませうよ。」

惣吉の興奮した感情が次第に母に傳つていつた。彼女は口のあたりをかすかに震はせ乍ら、自ら堪へられないやうな眼付で惣吉の顔を見守つてゐた。

「今日は何曜でせう。」と惣吉は尋ねた。

「土曜でせう、たしか……」

惣吉は來週から會社へ出やうと決心してゐた。彼は口へ出してはそれを母に云はなかつたけれど、もう母がそれを知つてゐることをはつきりと感じた。

その日彼は縁先の垣根のほとりに、幾本もの青い草の芽が伸びてゐるのに氣が付いて、驚いたやうにそれを長く見つめてゐた。

翌日惣吉は自分で醫者の所へ行つて、もう藥を止していゝかを尋ねた。

「さうですねえ。」と醫者は一寸首を傾けた。「もう大抵いゝやうですけれど、まあ暫く樣子を見てごらんなさい。一體あなたは常に何か强壯劑を取らなければいけませんね。」

惣吉はそれでもう醫者との交渉も斷つていゝのだと思つた。そしてその歸りに自働電話に立ち寄つて、江上の家へ明日から出勤する旨を傳へた。

彼はたい力を得たい、働きたいと思つた。さうすることが、本當に母やより子に何かを與へる途で

あゝ、又自分の心に愛を育てゝゆく途であると思つた。――私は今私が衷心から感じ信じた方向に眞直に進みたい。もし中途で病に斃れやうともそれは私の知る所ではない。もし現在の私の信念が眞實であるならば、それは未來に向つても眞實であらねばならない。私はたゞ眞實がほしい。

彼は胸に強く何かを抱きしめたくなつた。丁度二階の縁に出て眺めると、空も地も一面に初春の光りを浴びてゐた。そして彼はすぐ下に見える僅かな黒い土地のうちにも、靜に醱酵し萌えいでんとしてゐるものゝあるのを感じた。――どうしてかう人家の立ち並んだのばかりを常に見てゐなければならないのであらうか。廣い大地の胸が慕はしい。遠い地平線まで圓くふくらんで、靜に種子を萌え出でしむる野が慕はしい。

そして彼は自分の胸の奥に滿されない空虚があるのを感じた。それは淡い何かの物影のやうな空虚であつた。けれど彼は眼に涙をにじませながら自分の力を信じた。自分の途を信じた。

明日から出勤する由を彼が云つた時、母はたゞ彼の身體を氣遣つたばかりで、別に引きとめようともしないかつた。彼女はそれが無駄であることを知つてゐた。

「たゞね、あまり無理をしないやうにして下さいよ。また病氣にでもなりますと、お前さんの心はそれで濟みませうけれど、ほんとうに私がつらいんですからね。まだ小さいけれどよりちやんまでもお前さんを力にしてゐるらしいんですよ。……ほんとにあの子が大きくなつたらどんなにかお前さんの

ことをね……」

惣吉は駄つて母の前に坐つてゐた。そして何だか母に濟まないやうな氣がしてきた。

## 四

惣吉は一日社で働いて夕方家に歸つた。仕事はつまらぬことだつたけれど、生活のために働いてゐるといふ意識が彼に力を與へた。そして家に歸つた時も別に疲勞を覺えなかつた。たゞ何だか家の中が氣懸りになつて急いで歸つて來た。

彼の姿を見て母は一寸落ち付かない素振りをしたが、それからすぐに彼のぬいだ外套を自ら手に取つた。そして云つた。

「まだ顏の色がよくありませんよ。疲れましたでせう。」

そして彼女は晝間といゝた下の關にいつてゐる從兄からの手紙を彼に渡した。

彼が緣側でその手紙を讀んでゐる時、より子が其處にかけて來て彼の背にまつはりついた。

「一寸ぢつとしてゐらつしやい。」と彼は云つた。手紙には長く無沙汰をした詫びやら、港の生活やら、また東京に歸りたいといふやうなことが認めてあつた。そして珍らしくもなからうが雲丹と鹽辛を少し送つたからお母さんと食べてくれといふやうなことが書き足してあつた。その小包はまだ屆いてゐ

なかつた。

惣吉は手紙を其處に置いてより子を膝に抱きかゝへた。

「兄ちやんもう御病氣はいゝの。」とより子は云つた。

「えゝもうすつかりいゝんですよ。……よりちやんは兄ちやんの病氣がよくなつた方がいゝか惡い方がいゝか、どちらがおすき？　え？」

「まだお惡いの。」とより子は分らないと云つたやうな顏をした。

惣吉は眼をそらして暮れてゆく空と地とを眺めた。空には落日の淡い反映があつた。地上には仄白い夕暮れがあつた。そして何物か惱みながら融けてゆくやうな氣配が空間に漂つて靜に移つていつた。煙がゆるく立ち昇つてゐた。

惣吉は次第にある寂寥に襲はれた。何處よりかしみ〴〵と寄せて來た哀愁に彼の心は包まれた。然し彼はその寂寥の底から透し見るやうな眼付きで生活の姿を見たやうな氣がした。凡てのものに深い生命がしみ渡つてゆくやうに思へた。そして堪へ難いやうな震へを胸の中に感じた。

彼は眼を大きく見開き乍ら熱い涙を流した。

默つて彼の羽織の紐を弄つてゐたより子が驚いたやうに顏を上げた。

「兄ちやんなぜ泣くの。」と彼女は囁いた。

惣吉が默つてゐるのを見て彼女は自分の袖でその涙を拭いてやつた。それからまた彼の新らしく出て來る涙をぢつと見てゐたが、その時突然彼女は今にも泣き出しさうな表情をして、いきなり彼の胸に顔を埋めてしまつた。惣吉はその小さい頭を緊と抱きしめた。

臺所の方から母が出て來た時、惣吉はそつと子を腕から離し、そしてまた涙の顔を母から隱した。

その晩皆でそれとなく一つ火鉢に集つた時、自然に下の關の從兄のことが話に上つた。

「この節はみんな遠くへ行くのを何とも思はないやうになりましたね。尤も往き來が便利にはなつたんですけれど……。知つてゐる人なんかでもだん〳〵遠くへ散つてゆくやぢやありませんか。」と母が淋しさうにして云つた。

「えゝ。だからまたみんな自分々々で生活してゆかなければならなくなつたんでせう。自由になつた代りに、獨立しなければならなくなつたんですよ。」

彼等には何となく遠くに思ひを走せるやうな心地であた。

「病氣がよくなつたから、私もこれから少し働いてみたいと思つてゐます。けれど當分は苦しいでせう。ほんとに我慢して下さい。」

「えゝ〳〵もうそんなことを云ふものぢやありませんよ。」と母は口早に云つた。「もうお前さんの身體

さへ達者になれば私は何の望みもありませんものね。一頃はどんなにか心配したでせう。夜になるとほつと今日も終へたと思つたんですよ。それがこの節は、また明日になつたら……なんかと思ふやうになりましたよ。」

惣吉はさう云ふ母の眼をもう避けなかつた。彼は母の顔に大膽な眼を据ゑて安らかな心で居ることが出來た。

「おはじきでもしませうか。」と惣吉はつまらなさうにしてゐるより子に云つた。

「兄ちやんと？……ほんと？」かう云つてより子は立ちさうにした。

「もう今晩はお止しなさい。」と母はより子をとめた。「兄ちやんはね、今日は疲れておいでだからまたあしたになさいね。……お前さんも今日は早く寢んだ方がいゝでせう。」

「えゝさうしませう。」と惣吉は答へた。

より子はぢつと兄の方を見てゐたが、そのまゝ母の肩にすがりついた。

「あたしもねやうかしら。」

「えゝ今晩はみんな早く寢みませうね。そしてあしたまた早くお起きしませうね。」

惣吉は寢る前に一度二階の雨戸を少し開いて外を眺めた。星がきら〳〵輝いてゐる月の無い晩だつた。勤紺の空とちら〳〵と震へる星の光りとの下に、大地は靜まり返つてゐた。その靜けさの下を縫

うて遠くに電車の音が、そして近くに火の番の木の音が聞えた。ずつと見渡すと眞黒く立ち並んだ人家のうちには、點々と明るい窓が見えてゐた。惣吉はその窓の明りを見ながら生活といふやうなことを漠然と考へた。彼は働いてゐる人々のことを思つた。苦しんでゐる人々のことを思つた。そして額の汗によつてパンを得ることのうちには、何かかう大きい愛が醱酵しつゝあるやうに思へてきた。その時彼は價値を絶した深い人生といふやうなものを覗くやうな氣がした。——生活するといふことは何かを胸に緊と抱きしめることのやうに思へる。私はたゞ自分の生活に、生命に、信仰を持つてゐる。眼を擧げると輝いた星が大空に圈を畫いて移つてゆくのがはつきり見えるやうな氣がした。そして惣吉は心の中に何か新らしいものが宿つてゆく力強い慄みを感じた。彼は自分と自分の心に手を合してぢつと祈りたくなつた。

母が來た時惣吉は雨戸をしめた。母は彼に蒲團をかけてやつて、上からその隅々を押へながら、「おやすみなさい。」と云つた。

母が去つた後、惣吉はぢつと眼を見開いて天井を見つめてゐた。それから横になつて靜に眼を閉ぢた。眼瞼のうちには何かぼーつとした明るみがあつた。